

佐野高と同付属中の生徒が制作した、性別を問わず誰もが着られる「第3の制服」がこの春から着用されている。高校の生徒会長選挙に立候補した生徒が「性別で決められた制服を着るのがつらい」という友人の話聞き、制服の改革を訴えたことが発端という。先日、私も同じ言葉聞いた。学校の制服ではなく、会社の制服の話だ。

私は、県内の複数の企業が集まる「女性リーダー講座」の講師を務めている。女性に自信を持ってリーダーシップを発揮してもらおうことと人脈づくりが、開催の目的だ。ある時、その講座のOG会に誘われた。交流が継続しているのが何よりうれしい。喜んで出向いた。5〜6人の女性の中に、かわいらしい男性が1人交じっていた。誰かの彼氏かと思ったら、なんとOGだった。驚いた。「先生に報告したかった」と打ち明けてくれた。

性同一性障害だった。今後の結婚を考えたときに「このままでいいのか」と、会社を辞め戸籍を男性に変える決断をしたという。将来を期待された女性リーダーだったため、「辞めなさい

の建設会社が、取り組みの開始に女性用トイレを設置したと言っていた。当時は「それが女性活躍推進か」とがっかりしたが、トイレがなくては確かに始まらない。私が新聞記者だった30

カートを履いていたんです」と語気を強め、吐き出すように言った。当時の気持ちがよくわかったのか、苦痛に顔をゆがめていた。初めて見る表情だった。考えてみたら当然だ。男性に

や「ダイバーシティー(多様性)」を考える男女混合の研修の中で、「制服の不公平」が話題になる。企業には、女性は制服、男性はスーツというところが少ない。「女性は制服支給・男性は自費購入」「女性は一律・男性は自由」という不公平。加えて、制服着用者は非着用者の補助をしているように思われがちで、理不尽。佐野高の生徒が言うように「特定の人のためではなく、皆が心地よいと思える」環境を目指すべきだろう。

第3の制服

野内 比佐子



年前、山で遭難者が出て「取材に行きたい」と言ったら「山にトイレはない。(女性)外でできるのか」と一笑に付され、「できます」という言葉をのみ込んだことを思い出した。

「特別な事情を持つ人が特別な感情を抱かずに」仕事に専念できる職場へ。この新しい制服を着た生徒たちはもうじき職場にやってくる。

いけなかったの?」と思うず聞いた。ホルモン治療によって容姿が変わっていくので、残っていたらうわさされたかもしれない。きつと耐えられない。やむを得なかった、という。残念だ。

会社勤めでつらかったことは「トイレ」だったという。トイレと言えば、女性活躍推進が始まった頃のシンポジウムで、パネリスト

女性用を使うことがつらかったというトイレの話は普通にできていた彼だった。が、少しの沈黙の後、「私、会社を辞めるその日までス

あしぎん総合研究所主任研究員。新聞記者、ビール会社の工場広報を経て2011年から、あしぎん総研。地域開発事業部で企業や自治体の人材育成支援、研修講師を務める。ビジネスコーチ、キャリアコンサルタント、ワークライフバランスコンサルタント。宇都宮市出身・在住。55歳。